

「おい地獄さ行くんだで！」

二人はデッキの手すりに寄りかかって、蝸牛が背のびをしたように延びて、海を抱え込んでいる函館の街を見ていた。——漁夫は指元まで吸いつくした煙草を唾と一緒に捨てた。巻煙草はおどけたように、色々にひっくりかえって、高い船腹をすれずれに落ちて行った。彼は身体一杯酒臭かった。

赤い太鼓腹を巾広く浮かばしている汽船や、積荷最中らしく海の中から片袖をグイと引張られてもいるように、思いっ切り片側に傾いているのや、黄色い、太い煙突、大きな鈴のようなウイ、南京虫のように船と船の間をせわしく縫っているランチ、寒々とざわめいている油煙やパン屑や腐った果物の浮いている何か特別な織物のような波……。風の工合で煙が波とすれずれになびいて、ムツとする石炭の匂いを送った。ウインチのガラガラという音が、時々波を伝って直接に響いてきた。

この蟹工船博光丸のすぐ手前に、ペンキの剥げた帆船が、へさぎの牛の鼻穴のようなところから、錨の鎖を下していた。甲板を、マドロス・パイプをくわえた外人が二人同じところを何度も機械人形のように、行ったり来たりしているのが見えた。ロシアの船らしかった。たしかに日本の「蟹工船」に対する監視船だった。

「おい地獄さ行くんだで！」

二人はデッキの手すりに寄りかかって、蝸牛が背のびをしたように延びて、海を抱え込んでいる函館の街を見ていた。——漁夫は指元まで吸いつくした煙草を唾と一緒に捨てた。巻煙草はおどけたように、色々にひっくりかえって、高い船腹をすれずれに落ちて行った。彼は身体一杯酒臭かった。

赤い太鼓腹を中広く浮かばしている汽船や、積荷最中らしく海の中から片袖をグイと引張られてもいるように、思い切り片側に傾いているのや、黄色い、太い煙突、大きな鈴のようなウイ、南京虫のように船と船の間をせわしく縫っているランチ、寒々とざわめいている油煙やパン屑や腐った果物の浮いている何か特別な織物のような波……。風の工合で煙が波とすれずれになびいて、ムツとする石炭の匂いを送った。ウインチのガラガラという音が、時々波を伝って直接に響いてきた。

この蟹工船博光丸のすぐ手前に、ペンキの剥げた帆船が、へさぎの牛の鼻穴のようなところから、錨の鎖を下していた。甲板を、マドロス・パイプをくわえた外人が二人同じところを何度も機械人形のように、行ったり来たりしているのが見えた。ロシアの船らしかった。たしかに日本の「蟹工船」に対する監視船だった。

渠は歩き出した。

銃が重い、背囊が重い、脚が重い、アルミニウム製の金腕が腰の剣に当たってカタカタと鳴る。その音が興奮した神経をおびただしく刺戟するので、幾度かそれを直してみたが、どうしても鳴る、カタカタと鳴る。もう厭になつてしまった。

病気はほんとうに治つたのではないから、息が非常に切れる。全身には悪熱悪寒が絶えず往来する。頭脳が火のように熱して、顫顫がはげしい脈を打つ。なぜ、病院を出た？ 軍医があとがたいせつだと言つてあれほど留めたのに、なぜ病院を出た？ こう思ったが、渠はそれを悔いはしなかつた。敵の捨てて遁げた汚い洋館の板敷き、八畳くらいの室に、病兵、負傷兵が十五人、衰頹と不潔と叫喚と重苦しい空気と、それにすさまじい蠅の群集、よく二十日も辛抱していた。麦飯の粥に少しばかりの食塩、よくあれでも飢餓を凌いだ。かれは病院の背後の便所を思い出してゾツとした。急造の穴の掘りようが浅いので、臭気が鼻と眼とをはげしく撲つ。蠅がワンと飛ぶ。石灰の灰色に汚れたのが胸をむかむかさせる。

あれよりは……あそこにいるよりは、この闊々とした野の方がいい。どれほど好いかしれぬ。満洲の野は荒漠として何も無い。畑にはもう熟しかけた高粱が連なっているばかりだ。けれど新鮮な空気がある、日の光がある、雲がある、山がある、——すさまじい声が急に耳に入ったので、立ち留まつてかれはそつちを見た。さっきの汽車がまだあそこにいる。釜のない煙筒の

渠は歩き出した。

銃が重い、背囊が重い、脚が重い、アルミニウム製の金椀が腰の剣に当たってカタカタと鳴る。その音が興奮した神経をおびただしく刺戟するので、幾度かそれを直してみたが、どうしても鳴る、カタカタと鳴る。もう厭になつてしまった。

病気はほんとうに治つたのではないから、息が非常に切れる。全身には悪熱悪寒が絶えず往来する。頭脳が火のように熱して、顚顚がはげしい脈を打つ。なぜ、病院を出た？ 軍医があとがたいせつだと言つてあれほど留めたのに、なぜ病院を出た？ こう思ったが、渠はそれを悔いはしなかつた。敵の捨てて遁げた汚い洋館の板敷き、八畳くらいの室に、病兵、負傷兵が十五人、衰頹と不潔と叫喚と重苦しい空気と、それにすさまじい蠅の群集、よく二十日も辛抱していた。麦飯の粥に少しばかりの食塩、よくあれでも飢餓を凌いだ。かれは病院の背後の便所を思い出してゾツとした。急造の穴の掘りようが浅いので、臭気が鼻と眼とをはげしく撲つ。蠅がワンと飛ぶ。石灰の灰色に汚れたのが胸をむかむかさせる。

あれよりは……あそこにいるよりは、この闊々とした野の方がいい。どれほど好いかしれぬ。満洲の野は荒漠として何もない。畑にはもう熟しかけた高粱が連なっているばかりだ。けれど新鮮な空気がある、日の光がある、雲がある、山がある、——すさまじい声が急に耳に入ったので、立ち留まつてかれはそつちを見た。さっきの汽車がまだあそこにいる。釜のない煙筒の

風が、山の方から吹いて来ました。学校の先生がお通りになると、街で遊んでいた生徒達が、みんなお辞儀をするように、風が通ると、林に立っている若い梢も、野の草も、みんなお辞儀をすることでした。

風は、街の方へも吹いて来ました。それはたいそう面白そうでした。教会の十字架を吹いたり、煙突の口で鳴ったり、街の角を廻るとき蜻蛉返りをしたりする様子は、とても面白そうで、恰度子供達が「鬼ごっこするもん寄っといで」と言うように、「ダンスをするもん寄っといで」といながら、風の遊仲間を集めるのでした。

風が面白そうな歌をうたいながら、ダンスをして躍廻るので、干物台のエプロンや、子供の着物もダンスをはじめます。すると木の葉も、枝の端で踊りだす。街に落ちていた煙草の吸殻も、紙屑も空に舞上って踊るのでした。

その時、街を歩いていた幸太郎という子供の帽子が浮かれだして、いつの間にか、幸太郎の頭から飛下りて、ダンスをしながら街を駆けだしました。その帽子には、長いリボンがついていたから、遠くから見るとまるで鳥のように飛ぶのでした。幸太郎は、驚いて、「止め！」と号令をかけたが、帽子は聞えないふりをして、風とふざけながら、どんどん大通りの方までとんでゆきます。

一生懸命に、幸太郎は追っかけたから、やっこのことで

追いついて、帽子のリボンを押えようとすると、またどつと風が吹いてきたので、こんどはまるで輪のようになると廻りながら駆けだしました。

「坊ちゃん、なかなかつかまりませんよ。」

帽子が駆けながらいうのです。

すると、こんどは大通りから横町の方へ風が吹きまわしたので、幸太郎の帽子も、風と一しよに、横町へ曲ってしまいました。そしてそこにあつたビール樽のかけへかくれました。

幸太郎は大急ぎで、横町の角まできたが、帽子は見つかりません。

「ぼくの帽子がないや」

幸太郎は、もう泣きだしそうになって言いました。帽子をつれていった風も、幸太郎を気の毒になつてきて、

「坊ちゃん、私が見つけてあげましょう。」

そういつて、ビール樽のかけの帽子のしっぽを、ひらひらと吹いて見せました。幸太郎は、すぐ帽子のある所を見つけた。

「万歳！」

幸太郎は、帽子の尻尾をつかんで叫びました。

「風やい、もう取られないぞ！」

幸太郎は、帽子のつばを両手で、しっかりと握っていいま

風が、山の方から吹いて来ました。学校の先生がお通りになると、街で遊んでいた生徒達が、みんなお辞儀をするように、風が通ると、林に立っている若い梢も、野の草も、みんなお辞儀をすることでした。

風は、街の方へも吹いて来ました。それはたいそう面白そうでした。教会の十字架を吹いたり、煙突の口で鳴ったり、街の角を廻るとき蜻蛉返りをしたりする様子は、とても面白そうで、恰度子供達が「鬼ごっこするもん寄っといで」と言うように、「ダンスをするもん寄っといで」とい

いながら、風の遊仲間を集めるのでした。風が面白そうな歌をうたいながら、ダンスをして躍廻るので、干物台のエプロンや、子供の着物もダンスをはじめます。すると木の葉も、枝の端で踊りだす。街に落ちていた煙草の吸殻も、紙屑も空に舞上って踊るのでした。

その時、街を歩いていた幸太郎という子供の帽子が浮かれだして、いつの間にか、幸太郎の頭から飛下りて、ダンスをしながら街を駆けだしました。その帽子には、長いリボンがついていたから、遠くから見るとまるで鳥のように飛ぶのでした。幸太郎は、驚いて、「止め！」と号令をかけたが、帽子は聞えないふりをして、風とふざけながら、どんどん大通りの方までとんでゆきます。

一生懸命に、幸太郎は追っかけたから、やっこのことで

追いついて、帽子のリボンを押えようとすると、またどつと風が吹いてきたので、こんどはまるで輪のようになってくると廻りながら駆けだしました。

「坊ちゃん、なかなかつかまりませんよ。」

帽子が駆けながらいうのです。

すると、こんどは大通りから横町の方へ風が吹きまわしたので、幸太郎の帽子も、風と一しよに、横町へ曲ってしまいました。そしてそこにあつたビール樽のかけへかくれました。

幸太郎は大急ぎで、横町の角まできたが、帽子は見つかりません。

「ぼくの帽子がないや」

幸太郎は、もう泣きだしそうになって言いました。帽子をつれていった風も、幸太郎を気の毒になつてきて、

「坊ちゃん、私が見つけてあげましょう。」

そういつて、ビール樽のかけの帽子のしっぽを、ひらひらと吹いて見せました。幸太郎は、すぐ帽子のある所を見つけた。

「万歳！」

幸太郎は、帽子の尻尾をつかんで叫びました。

「風やい、もう取られないぞ！」

幸太郎は、帽子のつばを両手で、しっかりと握っていいま

岩佐又兵衛作「山中常盤双紙」というものが展覧されているのを見つけた。そのとき気付いたことを左に覚書しておく。

奥州にいる牛若丸に逢いたくなくなった母常盤が侍女を一人つれて東へ下る。途中の宿で盗賊の群に襲われ、着物を剥がれた上に刺殺される、そのあとへ母をたずねて上京の途上にある牛若が偶然泊り合わせ、亡霊の告げによってその死を知る。そうして復讐を計画し、詭計によって賊をおびき寄せておいて皆殺しにする。後日再び奥州から大軍の将として上洛する途上この宿に立寄り懇ろに母の霊を祭る、という物語を絵巻物十二巻に仕立てたものである。

絵巻物というものは現代の映画の先祖と見ることが出来る。これについては前にも書いたことがあったが、この山中常盤双紙は、そういう見方の適切なことを実証するのに好都合な一例と見られることも出来る。

絵巻物の色々な場面の排列、モニタージュまた一つの場面の推移をはこぶコマ数の按配、テンポの緩急といったようなものに対する画家の計画には、ちょうど映画監督、編輯者のそれと同様な頭脳のはたらきを必要とすることがわかる。

映画としてのこの絵巻のストーリーは、猿蟹合戦より忠臣蔵に至るあらゆる仇打ち物語に典型的な型式を具えている。はじめは仇打ち事件の素因への道行であり、次に第一のクライマックスの殺し場がある。その次に復讐への径路があって第二の頂点仇打ちの場になる。そうして結局の